

授業が楽しいと実感できる小学校外国語活動の研究

— 「TARGET構造」理論の活用をととして —

教職実践応用領域 授業づくり履修モデル
岡山千砂

I はじめに

平成 25 年 12 月、文部科学省は、初等中等教育段階からのグローバル化に対応した教育環境作りのため「英語教育改革実施計画」を発表した。そして、「小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図る」ことを掲げ、2020 年(平成 32 年)の東京オリンピックを見据え、新たな英語教育が本格展開できるように、体制整備等を含め逐次改革を推進することとしている。小学校の英語については、中学年から導入され高学年では「教科型」として実施されることが明示されている。

II 研究の背景

1 A市における英語教育について

平成 23 年度から実施された小学校学習指導要領において、小学校高学年での外国語活動が登場した。これに先立ちA市では、中学校で平成 18 年度から、小学校で平成 19 年度から「教育課程特例」により、小中一貫の英語教育が既に展開されてきている。小学校 3 年生から中学校 3 年生までを三つのステージに分け、それぞれに目標を置いている。

中学年から外国語活動を行ってきたA市において、教科化を見据えた高学年での英語の在り方のモデルの一つを考え、中学校への接続を提案することは、可能かつ必要なことであろう。

2 自身の経験からの実感と課題

(1) 「聞くこと」「話すこと」について

小学校外国語活動(以下英語活動)を担当して以来、子どもの豊かな英語活動の在り方を模索してきた。「英語嫌いをつくらない」「中学校の前倒しにしない」と、活動重視の実践を心がけるなかで、実感してきたことがある。

子どもは、友達を知ることが好きである。ふだん話さない友達にインタビューできるとうれしかったと感想を残す。単元の仕上げに、自分の本当の情報を分かち合うインタビューを行い、必然性をもたせたエンカウンターの高体験を重視してきた効果を感じる。

しかし自信がないと話すことをためらう子どもが多く、インタビューでは仲よしグループで固まってしまうこともしばしば見られる。前回習った英語が定着していないこともある。また学校外で英語学習の経験のある子ども(以下英語既習者)が「このような英語は簡単すぎる」または「習っているのにまちがえたら恥だから」と参加に消極的なこともある。

週 1 時間の授業であることと、学級の人数が多く英語既習者と初習者とが混在する教室での実践の難しさを感じる。子どもたちには「聞くこと」「話すこと」ができるという気持ちを積み重ね、「英語の授業が楽しい」と感じてほしい。

(2) 「読むこと」「書くこと」について

これまで、中学校英語教員からの「小学校でアルファベットは書けるようにしてきてほしい」という声は耳に入ってきていた。

5 年生からALTとの協働授業が行われている。休み時間になるとALTを取り囲んで話しかけようとする態度などからその効果を感じる。毎回行っている振り返りカードに、自分の名前をローマ字で書く子が増えた。これもALT効果であろう。ところが書いた表記がまちがっていることも多い。小学校 3 年生で、訓令式ローマ字が導入されるが、その後の継続した指導が行われておらず、ローマ字教育の効果が中途半端になっていたことは否めない。しかし、名前を書こうとすることに加え、絵カードに書かれた単語のスペルを、振り返りカードに書こうとしている姿勢も多く見られた。子どもたちの「書きたい」という意欲は高い。

書くことだけでなく、絵カードを示すと、教師がその単語の読みを発音する前に読もうとする態度が見られる。例えば、「動物」を表す“animal”と書こうとすると、書いているそばから「ア・ニ・マ…アニマルでしょ?」のように、読もうとしている。

これらより、小学校でも「読むこと」「書くこと」を支援していくことは効果的であると考えられる。

(3) アンケートより

どのようなことに留意することが「英語は楽しい」と感

【資料 1 アンケート結果相関分析 $r > 0.5$ 】

アンケート実施 平成26年11月15日 対象:豊橋市立栄小 学校5年生児童有効 回答108名	案次 の み 授 業 で 業 す で か 何 ° を や る の か	す で 学 校 い で 出 勉 す 強 こ し と た が こ あ と り を ま	材 授 は 業 で 興 味 取 が り わ 扱 き つ ま て す い か る ° 題	か 授 が 業 で 理 解 何 で を き や ま つ す て す て い か る の	す 先 生 の 教 え か え ° 方 は わ か り や	い き 振 出 授 り 業 返 て で り い や か ま つ ° す た ど か こ を く 思 と	ま 要 す め ら か れ る と や る 気 が 出	ま す 英 語 か を 読 む の は ん だ だ 切 り だ 書 き たい い り
英語の授業は楽しいですか	0.77	0.65	0.64	0.62	0.62	0.62	0.6	0.56

じることの有効なのかを知る一助とするために、アンケートをとった。回答は1(そう思わない)から5(そう思う)の5段階を用い、自由記述の欄も設けた。平成26年10月、本校の5年生に実施、有効回答110名であった。

アンケート結果を相関分析にかけ、「英語の授業は楽しいですか」という質問に対し、相関係数が0.5以上の相関の高かったものを表にした。【資料1】

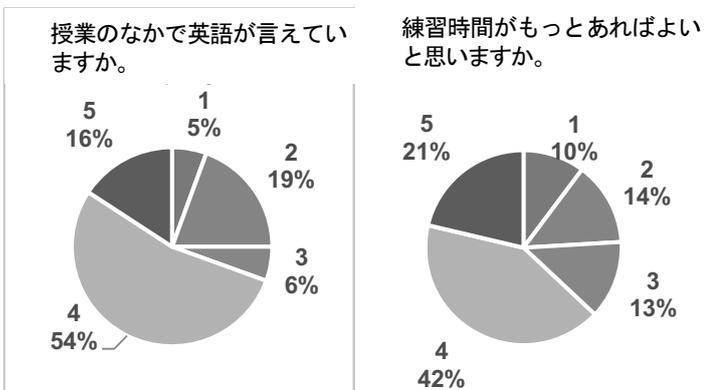
英語の授業が楽しいと思うためには、以下の点に留意すると有効であろうと考えた。

【資料2 相関分析から読み取れること】

- ①次の授業への見通しがもてるようなもので、家で想起でき、興味のもてるような題材を取り扱う。
- ②褒め認めることに留意し、わかりやすく教える。
- ③授業の最後の振り返りで、1時間を思い起こさせるようにする。
- ④文字による認知を取り扱う。

また、「授業の中で英語を言えていますか」という質問に対しては、70%が肯定的に答え、決して低い数字ではないが、話すことに自信がない子どもが30%いることは看過できない。そして「練習時間がもっとあればいいと思いますか」については、63%が「もっと練習したい」と回答している。【資料3参照】

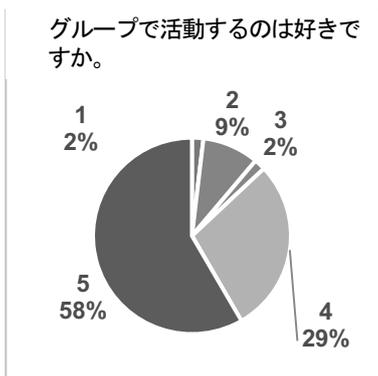
【資料3 アンケートより1】



このことより、練習する時間を確保することの大切さが読み取れる。

しかしながら、1週間1時間の限られた時間内でどのように時間を創出すればよいのだろうか。

【資料4 アンケートより2】



【資料4】「グループで活動するのは好きですか」について、実に87%の子どもが肯定的に答えている。一人では自信がないことの裏返しともとれるが、グループ活動の工夫は、練習の充実

へのヒントになりそうである。

自身の実感とアンケートの結果から、一人一人が会話に自信をもつことができ、英語をまちがえてもゲームで負けても、授業が楽しかったと感じられる楽しい学びに満ちた授業とするために、子どもの学習意欲を高める動機づけに注目した。

3 動機づけの先行研究から

(1) 達成目標理論

学校教育における動機づけは、主に個人の内的要因が問題とされてきた。そのなかでの内発的動機づけについて、1985年頃より、達成目標の認知などが児童生徒個人の動機づけの要因として取り上げられ、研究されてきている。

Dweck(1986)が提唱した、達成目標理論もその一つである。達成目標理論では、マスタリー目標とパフォーマンス目標の二つの目標があるとしている。

Ames(1992)は、目標志向性について、マスタリー目標は内発的動機づけを高めるが、パフォーマンス目標は他者との比較を増幅し、否定的に作用するとしている。英語活動は「コミュニケーション能力の素地を育成する」という目的で必修化された一方、「教科」ではなく「活動」という枠組みであることから、学級全体で楽しい雰囲気で行うことが望ましい。そのため、達成目標理論を支持していくのが適当であろう。

(2) TARGET構造理論

達成目標理論の中でも、学級全体の学習意欲を高めるためにアプローチした動機づけ理論を取り扱うEpstein(1989)のTARGET構造理論に注目した。

教師が、内発的動機づけを学級のどの場面で適用し、指導に活用すればよいのかをEpsteinは、classroom environmentと呼んでおり、谷島(1996)はそれを「教室環境」と表している。しかし、教室環境という呼称は、一般的には、動機づけの用語と認識されにくいいため、本稿では「クラス動機づけ条件」と呼ぶこととする。

Epsteinは、【資料5】のように「クラス動機づけ条件」六つを設定した。それらを課題構造(Task Dimension)、権限構造(Authority Dimension)、承認構造(Recognition Dimension)、集団構造(Grouping Dimension)、評価構造(Evaluation Dimension)、時間構造(Time Dimension)と呼び、頭文字をとってTARGET構造と名付けた。Maehr & Midgley(1991)もEpsteinの論を支持している。

これらの「クラス動機づけ条件」の構造化は、理論的な検討が主であり、実際の学校現場での実践検証がなされていない。

日本では、谷島・新井(1996)が、クラス動機づけ条件について諸理論を検討し、日本の教室場面に適合する「クラス動機づけ条件」を教師への面接調査に基づいて設定している。さらに谷島らは、中学生への質問紙法による調査で、その妥当性を確認している(1996)。

小島(2014)は、達成目標理論に基づき、TARGET構

造の妥当性を小学生への質問紙法により検証している。

【資料5 学級におけるTARGET構造(1989, Epstein) 谷島訳】

課題構造 Task Dimension	・基礎的・発展的の技能の学業カリキュラムや課外活動を含んだ、適切な難易水準における課題 ・思考を要求する課題 ・課題の新奇性と多様性 ・課題における新たな能力水準への挑戦
権限構造 Authority Dimension	・児童による、活発な学習の強調と、教師と児童による意志決定の機会の共有 ・選択と自己志向のための機会 ・年齢や能力に従う参加の型や速度の変化
承認構造 Recognition Dimension	・多くの技能や才能についての日々や学期ごとの進歩や卓越をすべての児童が承認する ・新しい価値や能力に応じた報酬や承認の変化を実感させる
集団構造 Grouping Dimension	・同様なまたは異なる能力や出身の児童間の相互作用を促進する ・児童の状況を改善する柔軟なグルーピング ・友達関係を変化させ得るようなパートナー
評価構造 Evaluation Dimension	・学校における技能での成功を評価するための明確な基準と公正な評価 ・向上のための情報の伝達 ・児童の能力を変化させるための基準やモニタリング、および情報システム
時間構造 Time Dimension	・学習における速度の多様性を認識し期待すること、および興味ある教材を集中的に学習する機会の提供 ・コースと配分の柔軟な計画化 ・課題の困難度と児童の能力に見合う時間制限の変化

また、この TARGET 構造理論は、P.2【資料2】で述べた「英語が楽しいと思うために効果的なこと」と【資料6】のようにつながっている。

【資料6 資料2とTARGET構造理論とのかかわり】

- ①次の授業への見通しがもてるようなもので、家で想起でき、興味のもてるような題材を取り扱う。⇨課題構造
- ②褒め認めることに留意し、わかりやすく教える。
⇨承認構造 および ⇨権限構造
- ③授業の最後の振り返りで、1時間を思いおこさせるようにする。⇨評価構造
- ④文字による認知を取り扱う。⇨評価構造

「④文字による認知を取り扱う」について、小学校での文字の導入についての先行研究は、山本(2013,2014)が、大阪の小学校で行い、「高学年ならば2時間で3語程度の英単語の導入は無理がない」としている。そのことを参考にし、振り返りカードの中で、表記を取り扱おうと考えたため、「評価構造」としたい。

TARGET 構造理論を小学校の、英語活動の授業の実践への適用をし、検証をすることは可能と考えた。

学習意欲を高め、文字に興味をもち、「英語の授業が楽しい」と思う子どもを育てることは、英語の入門期で最も大切なことと信じる。このことはまさに次の段階、とりわけ中学校英語へのつながりを成すであろう。

Ⅲ 平成26年度の研究実践

1 研究の目的

1年目は、以下の点に留意して実践を行う。

- ・更なる学習段階への展望をもち、動機づけを高めるために、TARGET 構造を用いて授業のつくり方を整理する。

2 研究の対象

A市立B小学校の5年生児童110名を経年で研究する。5年生での実践検証後、研究方法を見直していく。

3 対象児童の実態

平成26年度5年生の3学級は、一つの学級が37名と大人数であった。5年生の当初、同じ学級に話したことのない子どもが何名もいる状態であった。女子は小グループ化し、英語活動で、対話形式の活動をすると自分の仲よしグループで固まってしまっていた。男子は、学習に前向きな子どもが、どの学級にも数名いるが、大勢は授業参加に消極的であった。

消極的な子に聞き取りをすると、「塾に通っているからこんな簡単な英語はつまらない」という子どもと「よくわからない」「言えないから参加したくない」という子どもに大別された。

4 研究の実際

5年生においては、ハロウィン実践とクリスマス実践を研究として行った。

課題構造：ハロウィンにおいては、「オリジナルマスク作りと自分のマスクの特徴について表現する」ことを課題とした。顔のパーツや「～できる」といった能力を表現させたところ、自分のマスクの描写をするため、思考を働かせる場面が見られた。

クリスマスにおいては、校内探検をしながら、7個のツリー飾りを探すことが課題であった。グループによって異なるルートを与えたため、誰かの後をたどればよいのではなく、ALTと何度もやりとりをする必要があった。きちんと会話をしないと完成できないため、話そうとする意欲が高まった。

権限構造：ハロウィンでは、どのようなオリジナルマスクを作り英語で表現するかということ個人で決定させた。そして、2文以上で表現することという条件を教師より与えた。

クリスマスでは、ツリーの飾りがどこにあるのか尋ねる会話の中で、リアクションをすることをルールとしたため、「I see.」「Really?」などのリアクション表現や「In the science room?」といった繰り返し表現が活発になった。また、場所を知らせるためのヒントカードを自分たち

で選ばせる、というゲーム性を取り入れたことでさらに活性化した。

承認構造: どちらの単元も子どもを褒め言葉で支えた。コミュニケーションポイントである①Eye Contact ②Big Voice③Big Smile④Gesture を活動中や授業の最後に「アイコンタクト賞」など承認したり教師からシールなどを与えたりして支えた。

ハロウィンでは⑤マスクの完成度⑥オリジナルな表現の2点も設け承認した。授業が活性するとともに、⑤⑥により「よりよいものを作ろう」という挑戦心の芽ばえを感じた。

クリスマスでは、①～④に加え、⑦グループが協力しているかをポイントとして設け、子どもたちの温かい関係を築いた。

集団構造: どちらの単元も5～6人の男女混合グループを活動の基本とした。



【写真1 お面のここいいね!】

ハロウィンでは、グループでマスクやその表現を練り合った。友達に刺激され、よりよい作品や表現にしようとする姿が見られた。また、最終時には、学級内でインタビューする機会を設け、より上手に表現したい、より多くの友達と会話をしたいと動き出す姿が見られた。

クリスマスでは、グループでALTと会話をし、7つの飾りを見つけ、それぞれのグループのツリーを飾った。協力なしでは完成しない活動であったため、子どもたちは温かい関係を築くことができた。

評価構造: どちらの単元も、自己評価・相互評価のためのワークシートや振り返りカードを記入させた。

相互評価についてはワークシートに友達の評価を書く欄を設けたところ、「笑顔がよかった」「発音がよかった」などとよいところを認めているものや「声がもう少し大きいとよかった」などと温かいアドバイスが書かれていた。

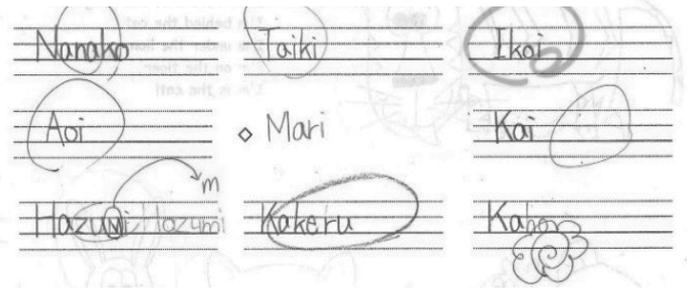
自己評価については、振り返りカードに「今日は、英語で『校長室』がうまく言えなかった。練習したい」のような自らを振り返るものとなった。

評価構造の中で、「書くこと」を行った。5年生ではへボン式ローマ字表記を中心に実践した。

ローマ字表記学習についての順序としては①自分の名前 ②隣の席の子の名前 ③小集団(学習班)の子の名前を取り扱うこととした。毎回の振り返りカードに四線を入れて表記を促し、朱書きで支えた。固有名詞を取り扱った理由は、必然性があり、へボン式に慣れることと、大文字と小文字の使い分けを意識することが容易だと考えたからである。

実践後には、ほとんどの子どもが大文字・小文字・字間・バランスに気をつけて名前を表記できるようになっ

【資料7 座席をローマ字で書きこむ振り返りカード】



た。【資料7参照】

時間構造: どちらの単元も、ゴールの姿を示し、時間配分を考え、実践を行った。しかしながら、次の時間に前時の学習を忘れていたり、低位の子どもが時間内にできなかったことを支えられなかったりした。週1時間であることとの限界を感じた。

5 検証と課題

(1) アンケートより

実践後平成27年1月にアンケートを行った。回答は1(そう思わない)から5(そう思う)の5段階を用い、有効回答108名であった。

『4年生よりも英語ができるようになったと思いますか』では80%が肯定的に答えているのに対し『授業の中で使う英語は授業の中で言えていますか』に対しては60%にとどまっている。このことから、練習する時間のあり方に改善が必要と考えられる。特に、練習することについては対話形式の練習が充実していないのではないかと、次のアンケート結果からも読み取れる。

①『グループでゲームをするのは好きですか』に対して87%が肯定しているのに対し②『ペアで会話をするのは好きですか』に対しては58%にとどまった。

また③『授業で友達に教えてあげたいですか』④『友達から認められたり褒められたりしたいですか』の肯定的回答が62%であることから、学級全体の雰囲気をよくし、対話を重視したコミュニケーション活動を増やしていく必要を感じる。

(2) TARGET 構造について

実践を行う中で、六つの構造が交錯し、自分自身がすっきりしないところがあった。

「課題構造」は、新奇性・多様性のある、少々難しいが乗り越えられると思われる題材で、成功体験を積むことが「やればできる」という動機づけになると考えていた。しかし、「時間構造」で単元の中で繰り返し語彙や表現を与えていくこともまた成功体験を積むことである。もとより Epstein が提唱した「時間構造」は、アメリカのような他民族国家で児童が自分のレベルに合わせた学習時間を自分で設定できることであり、日本のような一斉授業に適応しにくいものであった。さらに週1時間という制約もあった。それを「柔軟な計画化」とし、教育課程の中で無理が生じてしまった。しかし、課題を遂行するため

の単元のデザインは大切である。この二つの構造は併せて「課題・時間構造」とすることが日本の学校に合っているだろう。

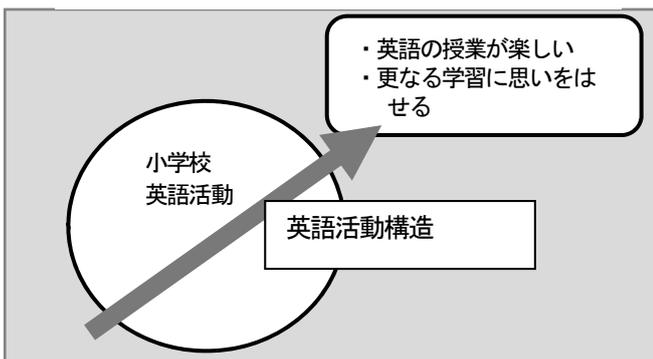
「承認構造」は、子どもを褒めることであり、これは教師から子どもへの評価に他ならない。「評価構造」の下位構造にするべきであろう。また、1年目において、「ヘボン式ローマ字を書くことを支援したが、「読むこと」への支援は積極的ではなかった。この点も補強していく必要がある。

そこで六つの構造を【資料8】のように整理した。このTARGET構造を改定した枠組みを「英語活動構造」と呼ぶこととし、小学校英語活動を切り取っていき、「英語の授業が楽しい子」「更なる学習に思いをはせる子」を導いていく【資料9参照】。

【資料8 英語活動構造】

課題・時間構造	・基礎的・発展的スキルを伸ばすための適切な難易水準における課題 ・成功体験を積みあげる単元デザイン
権限構造	・児童が選択の余地のある学習方法の与え方 ・活発な学習の強調のための学習規律
集団構造	・グループ内異質グループ間等質と意識したグルーピング ・友達関係を良好にさせるようなグルーピング
評価構造	・教師から児童に与える明確な評価(褒め言葉および技能チェック) ・児童の相互評価による評価 ・児童の自己評価

【資料9 平成27年度 研究の構造図】



IV 平成27年度の研究実践

1 対象児童の実態

平成26年度の1月に「対話を重視したコミュニケーションの必要を感じる」と分析した。3月、最終単元での「ALTと話そう」において、いざALTと向かい合うと、もじもじして話せない子が多かった。やはり対話には大きなハードルがあった。また、個別に見取る機会があったことで、「話すこと」が定着していない子どもがいることがわかった。

本年度、子どもたちの英語活動を経年で担当すること

になった。昨年度の課題と年度当初の観察を元に、「英語が楽しい。更に学びたい」と動機づけられる授業を考えていく必要がある。

1学級の人数が多く、学力差に開きがある。英語でも同様である。さらに外国語という特殊性もある。そこで、中教審答申(平成20年1月)で示された、習得・活用・探究を英語活動でも意識させたいと考えた。

単元で扱う英語表現で、教師の与えた型の表現を言うことを「習得」の段階、さらに自分の言いたいことを工夫しようとする子を認める「活用」の段階を意識させる。以下の表のように『1習得—探究型』と『2習得—活用—探究型』の2層を適用し、1型の子は2型を目ざしたり、題材によっては往還になったりしてもよい。

【資料10 外国語活動における二つの型】

1型	教師が示した型に沿って表現をし、今後の意欲につなげる	↑	↓
2型	教師が示した型を使ったのち、自分で表現したい英語を工夫し、今後の学習意欲につなげる。		

2 目ざす子ども像と研究の仮説

以上より、目ざす子ども像を次のように設定した。

目ざす子ども像

- ①英語での対話に自信をもち、授業が楽しいと感じる子ども
- ②更なる学習、とりわけ中学校での英語の授業に思いをはせる子ども

目ざす子ども像にせまるため、研究の仮説を以下のよう立てた。

研究の仮説

クラス動機づけ条件「英語活動構造」を意識しながら英語活動を進めていけば、英語での対話に自信をもち、授業が楽しいと感じる子どもになり、「もっと学びたい」と更なる学習への興味を高め、中学校での授業を楽しみにする子になるだろう。

3 研究のてだて

仮説を検証し、目ざす子ども像を具現化するために次のようなてだてを講じ、実践を行っていく。

てだて 英語活動構造の具体化

課題・時間構造

子どもにとって魅力的な題材を選定し、単元をいくつかの小単元で構成し、それぞれの小単元で学習する表現、毎時間のデザインを授業の最初に示す。単元のゴールの姿については、単元名に表し、毎時間板書で示す。毎時間使用する語彙表現のスペルをわかりやすく板書で表す。

権限構造

ここには「習得—活用」の考えも取り入れる。自分の能

力に合わせて英語表現を選択できることを「自分ペース」と名づけ、授業で取り入れる。小単元の最終時には、「自分の言いたいこと」を工夫できる活動を仕組んでいるが、最初に教師が示した例を参考にしても、自分で表現をつくり出してもよいこととする。

また、学習規律については、「先生律」と名づけ、活動の最初にルールを徹底する。特に、学級内でインタビューに向かう時は、仲のよい子で固まらないよう留意する。

集団構造

小単元の中で、グループで活動する時間を設ける。

男女混合で構成されている5～6人の生活班を基本にするが、本研究では、修学旅行が題材のため、男女混合、リーダー格の子どもを含む4～5人の修学旅行班も採用する。

評価構造

(1) 教師対子ども

教師から子どもへの評価を二通り設定する。①授業の中での評価と②振り返りカードの評価である。

授業内では、子どもの会話の様子について【資料 11】のようにコミュニケーションポイントを与え、褒め言葉を使って支える。また、よかった子どもを披露し、よい点を全体でシェアする場を設ける。単元の最終時には、「英語チャレンジ」と称して、教師と子どもが一对一で会話をし、個を評価する。これはパフォーマンステストになるが、子どもの内的価値を高めるように褒め言葉で支える。

【資料 11 コミュニケーションポイントと褒め言葉】

コミュニケーションポイント

- 1 Eye contact がとれているか。
- 2 Clear Voice で話せているか。
- 3 Smile で会話ができているか。
- 4 Gesture を使っているか。
- 5 Reaction として、繰り返しやあいづちなど会話を円滑にする技法を使っているか。

褒め言葉

- レベル3 Excellent! Fantastic!
- レベル2 Very Good! Good job!
- レベル1 Good!

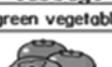
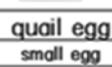
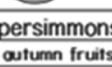
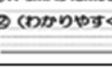
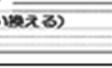
(2) 子どもの自己評価と相互評価

自己評価については、振り返りカードへの表記で内省できるようにする。記述を朱書きによって支える。

相互評価については、ワークシートを工夫し、友達どうしの評価ができるようにする。

なお、ワークシートには、本時の語彙や表現を英語で掲載し、「読む」「書く」を支える【資料 12】。

【資料 12 ワークシート例】

A-shi is famous for..... (...市は.....で有名です)	
	
herbs	cabbage
	
sashimi partner	green vegetable
	
quail egg	persimmons
	
small egg	autumn fruits
① A-shi is famous for ② (わかりやすく言い換える)	

目ざせ！修学旅行で英会話名人！（全 14 時間）

自分や家族のことを伝えよう③

- ・ALTの家族や部活のことがわかったよ。
- ・ダンスクラブでバンブーダンスっておもしろいね。
- ・自分のことも紹介してみよう。・あの子って水泳部なんだ

課題・時間構造

ALT が映像にて家族や部活動のことを紹介

権限構造および集団構造

習得の表現を、隣どうし又は座席の前後のペアでインタビューとした。

- ・ Who's this? This is my mother. She can cook.
- ・ What's your club? My club is basketball

活用は、家族の絵を描かせ、自分で英語をつくり Show&Tell の形式で紹介する。

学校クイズをつくろう。学校のことを知ろう③

- ・あのグループの出題はユニーク。惹きつけられるね
- ・あの子は一生懸命やっているね。真似したい。

権限構造と集団構造

習得の表現を、列をグループとしたゲーム活動で定着

- ・ How many students are there in our school?

活用は、6人グループで、「学校で〜はいくつあるか」というクイズを作りプレゼンテーションする。

評価構造

振り返りカードに自分たちの作った英文を書いてみる
教師は、よい態度の見られたプレゼンを認め褒める。

地域のことを紹介しよう③

- ・ALTのふるさとは、祭りや川が有名なんだね。
- ・その川はフィリピンでいちばん長いから有名なんだね
- ・自分は何を紹介しよう。どのように紹介しよう。
- ・①知らない語はゆっくり②知っている語に言い換える
③写真やジェスチャーで示す ④質問してもらおう

課題・時間構造

ALT がふるさとを説明した紹介を聞いて、よりよい紹介の仕方を知る。

権限構造

習得は、「豊橋名産ちくわ」を言えることとする。

- ・ Toyohashi is famous for chikuwa, fish paste.

集団構造

4人の修学旅行班をグループとし、豊橋のよいところを紹介する表現をグループ内で練り合い、発表し合う。

評価構造

友達の良いところを書く評価用紙を工夫する。個の振り返りカードは朱書きで支える。

インタビューの練習をしよう④

課題・時間構造

修学旅行での課題を確認し、練習のためにできるだけ多くの友達とインタビューする利点を説く。

権限・集団構造

友達と対話をする必然性をもたせる。

- ・ Excuse me. Do you speak English?
- ・ I'm from A-shii. ・ A-shi is famous for...
- ・ Sign, please.

先生に英語で報告しよう①

修学旅行

評価構造：英語チャレンジ

目ざす子ども像へ

4 単元構想

6年生は10月に京都・奈良への修学旅行があり、そこで多くの外国人に出会うこととなる。修学旅行で「外国人と一対一で会話をする」という課題は、子どもにとって英会話の成果を実感できるものとなる。

そこで、「目ざせ！修学旅行で英会話名人」という単元を設定する。日本や郷土のことを紹介することも必要となり、社会科での学習の効果も実感できる。相手にとって未知の情報を、よりよく伝える工夫について考える機会ともなり、「対話に自信がもてる」チャンスといえる。

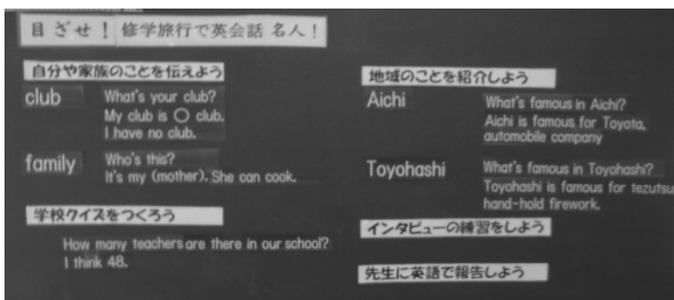
一問一答でなく、会話を広げられる子どもになってほしい。自分自身のことから徐々に会話の幅を広げ、郷土を発信できるような小単元の積み重ねとした。

修学旅行を大きなゴールとした単元を【資料13】に構想した。

なお、てだての有効性を、事前事後のアンケートの比較、子どもの姿の観察、振り返りカードやワークシートの記述を分析することにより、仮説の妥当性を検証する。

5 研究の実際

単元の初めに、課題・時間構造を使い、修学旅行で外国人観光客に会話をすることが大きなゴールであることを示した。そのために、身近なことから話せるようにしていくことを黒板に示した【写真2】。子どもからは、否定的なつぶやきは聞こえず、「ああ、そうなんだ」といった反応や、笑顔で隣の子と顔を見合わせる姿が多く見られた。この単元は子どもたちにとって魅力的であることを確信できた。また、7月であったため、「まだ時間があるからできるんじゃない」といったつぶやきも聞かれた。見通しをもたせることは効力感を与えることだといえる。



【写真2 単元第1回7月8日の板書】

(1) ステップ1 自分や家族のことを伝えよう

課題・時間構造を使って、ALTと教師が、家族のことや部活動についてモデル会話をした。特にALTが映像を使って母国フィリピンでの家族、学校でのクラブ活動を見せながら説明する時間を設けた。このことにより、子どもには、「家族について話す」「部活動について話す」ということが明確になった。

「部活動」について“*What's your club?*” “*It's volleyball club.*”の例を示し、自分の部活動を入れた会話をを行った。隣どうして会話をさせたのち、学級内で相手を見つけ、会話しあうインタビュー活動をした。この場合は集団構造

によって、ペアを小集団として設定した。権限構造として、「同じ部活動の子とは会話をしない」という先生律を設けたところ、教室のここそこで、“*Wow!*” “*Really?*”といた自然なリアクションが起こっていた。

家族について尋ねるときは、権限構造を使い、「家族の一人」の絵を描かせ、その人について、描写させた。与えた習得の表現は“*This is my mother. She can cook.*”であったが【資料14】のように自分なりに工夫して表現してきた子どもがいた。しかも、以前のワークシートを見てスペルを書いたり、調べて家庭で書いてきたりしたのである。これは、語彙が少ない中でも自分の表現を工夫したいという「活用」であり、学習意欲である「探究」であると判断できる。



「家族紹介」は教師とALTが、一人一人チェックをし、全員を褒め言葉で認めた。評価構造 また、教師が友達と会話をしているとき、待っている子どもたちは一生懸命聴き、友達の話すことを教師がどのように認めていくかを聴き取っていた。

評価構造としては、振り返りカードの記述を相当した。友達の部活動のインタビューの記述は、「あまり話したことなかった子の部活動が聞けてよかった」といった記述にあふれ、家族紹介については、「自分の家族のことを言えてうれしかった」といった記述が多かった。

(2) ステップ2 学校クイズをつくろう

二つめのステップとして、学校クイズをつくることを示した。使用する基本表現は“*How many*”であるため、課題・時間構造を使い、“*How many teachers are there in our school?*”と例を示した。この文の“*teachers*”の部分を入れ替えた文で学校クイズをつくりながら、改めて学校を知っていくことをねらいとした。

集団構造を行使し、6人の生活班をグループとし、自分たちで学校クイズを作らせた。このグループ活動の中で、個々が「ブランコがいくつあるかはどうか？」などと提案し、練り合うことが、友達と認め合う評価構造でもあった。あるグループは、「この学校で名字が鈴木の人が何人か調べようよ」の提案に「学校全部じゃあ多すぎるよ。『6年生では』にしない?」「先生、『6年生では』って英語で何て言うの」と表現の幅を広げていった。

学校クイズの最終時は、クイズ大会であった。クイズの答えをグループで考え、答え合わせは盛り上がった。そして“*How many boys are there in our school in basketball club?*”のように、「バスケット部で」ということを付け加えた表現ができたグループもあり、そのことは評価構造である振り返りカードでの記述でも称賛され

ていた。なにより、子どもたちが「お～」と自然な反応をしたことが評価構造そのものであった。

評価の在り方について、自分自身も勉強となった。

(3) ステップ3 地域のことを紹介しよう

三つめのステップとしては、ふるさとA市のことを発信できる子を育てたいと願った。

地域については、3年生の時に社会科で学習した。しかし、その時の学習を思い出せない子どももいた。

第1時で、修学旅行で、外国人観光客にA市を発信してることが知らせてあった。本時も課題・時間構造によって知らせ、教師のデモンストレーションを見せた。

ここで、集団構造を使い、修学旅行の4人のグループで活動することとした。構成は、男女混合で、どのグループにもリーダーとなる子どもがいた。

A市紹介をグループで考えさせた。【資料15】の例のように、さまざまな表現を導き、グループ内で練習をさせた。その際、評価構造により、ワークシート【資料16】を用いてグループメンバーの評価をさせた。このことにより、友達の助言から自分を見つめ改善することにつながった。なお、自信のないグループについては、教師が与えた表現を使用してよいこととした(権限構造)。

【資料15 子どもたちが導いたA市紹介の例】

○教師の例示をもとにした例

Toyohashi is famous for CHIKUWA(ちくわ), delicious fish paste.

○自分たちで調べて作った例

Toyohashi is famous for TOYOHASHI BRUSH, (豊橋筆) made of animal fur.

Toyohashi is famous for TOYOHASHI CURRY UDON, (豊橋カレーうどん), rice plus yam plus noodle plus quail eggs and curry.

【資料16 ワークシートの例】

メンバー	何を説明していた？(わかる範囲で)	良いところやアドバイス(かんたんに)
	「ぎく」…白いきほおそう式に使う	えがおでほっせり言っていた。
	「うずら」…小さいソバに合う	ほっ音がいい。ジェスター😊
	「うずら」…小さいソバにのせる	ほっ音◎ジェスターがあるといい。
	「市電」…ろめん電車おでんのでんしゃがある	ユニークでわかりやすい。声が大きいといい。

紹介するときは、絵や写真を示す、言い換えをする、はっきり話すことに加え、そのことがらについて質問されることを想定して、答えられるようにすることが大切だと思い、その練習をするために、グループで質問し合うように指示したのだが(権限構造)、『質問を英語で考える』ということに飛躍があったため、滞ってしまった。

(4) ステップ4 インタビューの練習をしよう

ステップ3で、できるようになることを願った「質問に

答える」ということが充実しなかったことを受けて、ステップ4では、変更を加えた。当初友達どうしてインタビューし合うことを予定していたが、新たな評価構造を使用することとした。それは、校区に住むC大学の外国人留学生とD大学の外国人の教員をゲストに招き、会話の練習をしてもらうことであった。

6人の外国の方の協力で、どのクラスにも2回ずつの訪問を設定することができた。国籍は、ブルガリア、インドネシア、ドイツ、オーストラリア、フランスと多岐に渡った。ゲストとは事前に打ち合わせをし、練習している会話のパターンを知らせた。そして、子どもたちが紹介したA市のことについて、反応したり(評価構造)、簡単な英語で質問をしたりするよう依頼した。

子どもたちには、ゲストの方に、時間内に4人以上インタビューし、並んで待っているときは友達とインタビューし合うように示した(権限構造)。

初めは、もじもじしていた子どもも、先に並んだ子に刺激されて並び、会話の練習をした。どの子どもも6人のゲスト全員と会話をすることができた。待っている間は、会話の練習だけでなく、「緊張したけどできたね」のように、友達と感想を分かち合っていた。

授業の最後には、ゲストの一人一人が、会話について、全体にアドバイスをした(評価構造)。



【写真3 ゲストと練習中】

修学旅行にて

平成27年10月26日・27日、6年生は、京都・奈良へと修学旅行に出かけた。そこで、外国人観光客に話しかけ、A市を発信することができた。



【写真4 修学旅行で英会話】

【資料17 しおりの例】

修学旅行のしおりに、「目ざせ！修学旅行で英会話名人！」のページがある。どの子どものページにも、【資料17】の例のように、紹介するものの単語と説明が英語で書かれ、「地図みせる！」「ゆっくり！」のように、会話で気をつけることがメモされ、修学

目ざせ！修学旅行で英会話名人！

① Hello. Do you speak English?

② I'm from Japan. 地図みせる！

③ I'm from _____ in Aichi. _____ is famous for **Cabbeges**.


diet partner ゆっり!

④ Sign, please. Claudia

旅行で対話した外国人のサインが記されていた。

(5) ステップ5 英語チャレンジ

子どもたちの成果を確認するために、教師とALTで子どもたちの会話を一人一人聞く機会を設けた。

「正確か」「滑らかに言えるか」「ジェスチャーや相づちを打てるか」について一人ずつ確認した。旅行後1週間を経過していたが、驚くことに70%の子どもは、ほとんど教師の助けを必要とせず、外国人観光客との会話を再現できた。30%の子どもは、滞ることもあったが、文の最初の部分を教師が補助すると、続けて言うことができた。108名全員を、褒め言葉で評価することができた(評価構造)。

6 検証と考察

実践前の7月と実践後の11月にアンケートをとった。回答は1(そう思わない)から5(そう思う)の5段階を用い、自由記述の欄も設けた。有効回答数はどちらも108名であった。

(1) 相関分析より

設定した四つの英語活動構造に関連する質問項目ごとにまとめ「英語の授業は楽しい」という項目との相関分析をしたものを比較した。【資料18】が、比較した表である。

実践前と実践後と比較すると、どの構造に属する項目も「授業は楽しい」との相関係数が高くなっていた。

特に「インタビューは好きですか」「ペア会話はよいと思いますか」の係数が飛躍的に高くなり、集団構造においてペアでの会話を推奨し、時には外国人を招き「通じた」という喜びを味わわせた成果であることが読み取れる。

「評価構造」で「先生から認められていますか」「友達から認められていますか」との相関係数が伸びていることから、認め合うことが授業の楽しさと相関するようになったことがわかる。

その他の項目の係数からも、「英語が楽しい」と感じる

【資料18 実践実施前後の「英語の授業は楽しいですか」との相関係数の比較】

構造	「課題・時間構造」に関すること				「権限構造」に関すること				「集団構造」に関すること				「評価構造」に関すること			
	す 題 材 に 興 味 が わ き ま	ま す か の 姿 を 意 識 し	ま す か 授 業 を 思 い 出 し	み で す か の 授 業 が 楽 し	初 英 に 語 は 言 え ま す か と 最	や 先 生 の 指 示 は わ か り	り 教 具 の 示 し 方 は わ か り	わ か り の 示 し 方 は よ く	で す か タ ビ ユ ー は 好 き	好 友 達 と の 教 え 合 い は	じ ま ま か 話 は 良 い と 感	活 動 は 好 き で す か	い ま ま か ら 認 め ら れ て	い ま ま か ら 認 め ら れ て	役 立 つ て の メ タ 認 知 は	授 業 は 楽 し い で す か
7月1日 有効回答 104名	0.67	0.54	0.49	0.46	0.38	0.49	0.55	0.42	0.32	0.49	0.26	0.46	0.37	0.43	0.58	1
11月12日 有効回答 104名	0.69	0.52	0.56	0.46	0.58	0.55	0.54	0.57	0.58	0.49	0.58	0.5	0.62	0.61	0.56	1

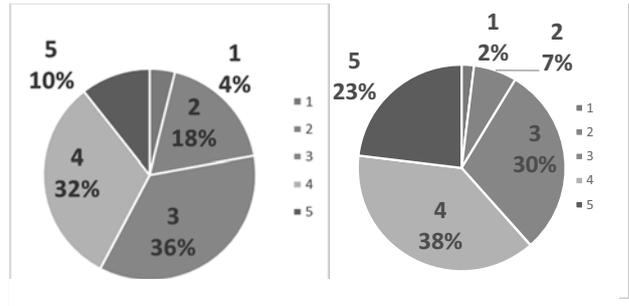
ために英語活動構造が有効であったことがわかる。

(2) 円グラフより

質問項目を円グラフで比較した。

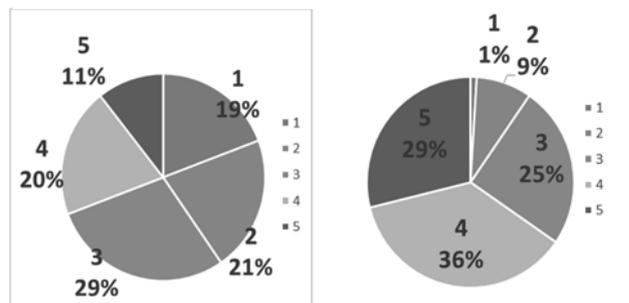
「英語の授業が楽しいですか」に対して、【資料19】のように、7月には肯定的回答が42%であったが11月には61%に増えた。実践の効果であるといえる。

【資料19】英語の授業は楽しいですか。実践前 実践後



課題となっていた「対話」に対する項目「ペアでの会話はよいと思いますか」に対しては、肯定的回答が31%から65%に増えている【資料20】。

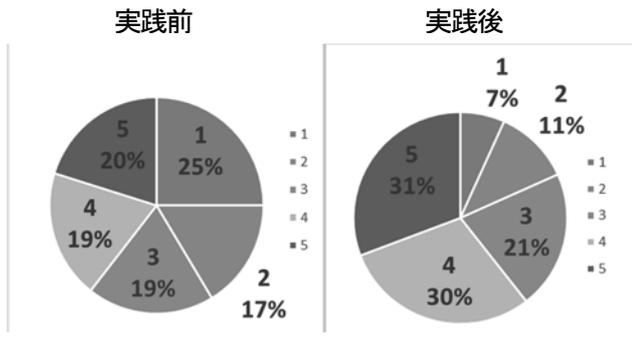
【資料20】ペアでの会話はよいと思いますか。実践前 実践後



また、この項目については「1 そう思わない」と否定的にとらえていた子が実施前は19%だったのに対し実施後は1%と劇的に少なくなっている。対話の機会を増やし、方法を工夫してきた成果といえる。

また、「更なる学習に思いをはせる子」について「中学校の英語の授業が楽しみですか」の項目を比較した。【資料 21】肯定的に回答した子が39%から61%に増えている。肯定的に答えた子の自由記述に「中学校に行ったら、もっと読んだり書いたりすることができるから」といったことが書かれており、「読む」「書く」について、意識させてきたことに効果があったといえる。

【資料 21】中学校の英語の授業が楽しみですか。



V 成果と今後の課題

本研究において、英語活動構造 (TARGET 構造) をてだてとして用い、その有効性を分析し、仮説の妥当性を検証した。

修学旅行単元後、再びクリスマスの季節がやってきた。「クリスマスに何が欲しいですか」「What would you like for Christmas?」「I'd like a phone.」の表現でインタビューを行った。そこには、男女を問わず、好きな子どうしで固まらず、積極的に英語を使って動き出す子どもの姿があった。このコミュニケーションへの態度を更なる段階につなげていきたいと心から願う。

平成 32 年度より、高学年での英語が教科となる。そこでは「話すこと・聞くこと」の定着が求められる。すなわち、この2項目には評価が伴ってくることとなる。

英語教育の入り口を担う小学校の役割は大きい。

この実践研究で行ったことは、教科となったときも大きな参考となってくことを確信している。

課題・時間構造は、授業の最初にゴールを示すことであり、CAN-DO にほかならない。そのゴールにどのくらい到達しつつあるのか、したのかを示すのが、評価構造である。今回の単元で行った、教師が一人一人を見取る方法を汎用化していくことが今後の課題となってくるだろう。

【参考文献】

- Ames, C, & Archer, J. (1988) Achievement goals in the classroom: Students' learning strategies and motivational processes, *Journal of Educational Psychology*, 80, 260-267
- Epstein, J.L. (1989) Effective schools or effective students: Dealing with diversity. In *Politics for America's public schools: Teachers, equity, indicators*, ed. R. Haskins and D. MacRee, 89-126. Norwood, NJ: Ahlex.
- Maehr, M.L. & Midgley, C (1991). Enchanting student motivation: *A school side approach. Educational Psychologist*, 26, 399-47
- ゾルタン・ドルニューイ 米山朝二／関昭典訳 (2005) 「動機づけを高める英語指導ストラテジー35」(大修館書店)
- 小島文恵 (2014) 「小学校外国語活動が中学校での英語学習に対する自己効力信念に及ぼす影響について」(『小学校英語教育学会学会誌』第 13 号, 118-133)
- 三木香織・山内弘継 (2003) 「学習環境と児童・生徒の動機づけ」(『心理学評論』第 46 号, 58-75)
- 三木 香織 (2007) 「中学生が知覚したクラス動機づけ条件の多次元構造」(『聖母女学院短期大学研究紀要』36, 1-7)
- 中山晃・土井香央理 (2013) 「小学校外国語活動における児童の不安に関するモデル構築の試み」(『国際基督教大学 教育研究所 教育研究』55, 303-316)
- 高橋美由紀・柳善和 (2011) 「新しい小学校英語科教育法」(協同出版, 8-70)
- 村野井仁 (2006) 「第 2 言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法」(大修館書店)
- 谷島弘仁 (1996) 「クラスの動機づけ構造の認知における最近の研究」(『筑波大学心理学研究』, 18, 135-146)
- 谷島弘仁・新井邦二郎 (1996) 「中学生における動機づけの認知に関する探索的検討」(『教育心理学研究』43, 74-84)
- 山本元子 (2013) 「小学校外国語活動における書くことの指導に関する一考察」(『常磐会学園大学紀要』第 13 号, 69-78)
- 山本元子 (2014) 「小学校外国語活動における文字指導」(『常磐会学園大学紀要』第 14 号, 63-74)

【付記】

愛知教育大学教職大学院において、このような研修の機会を与えてくださっている愛知県教育委員会、本市教育委員会にお礼を申し上げるとともに、校長先生をはじめとする勤務校教職員の皆様には、研修にご理解ご協力いただき心より感謝申し上げます。

また、課題実践研究にあたっては、熱心にご指導いただいた中妻雅彦先生、松井孝彦先生をはじめ、教職大学院の先生方にお礼申し上げます。

さらに実践を深めてまいりますので、今後ともよろしくご指導ご鞭撻ください。